

近畿ろうきん地域共生推進部長 法橋 聡 さん

## 協同金融の現在と未来

法橋さんには協同組合論の寄付講座にご協力いただき、講師も務めていただいた。授業の中で協同金融の紹介とその使命を熱く語っていただいた。金融の有効性に目を開かれた思いである。このインタビューの中でも協同金融のあるべき姿や可能性を示唆していただいた。協同組合の幅の広さと連帯の大きさを感じた次第である。大学生協にできること、大学生協でしかできないことを考えながら、協同組合の連帯を目指していきたいと思っている。

名和 大学生協の寄付講座『協同組合論』では、近畿ろうきんさんに協賛いただき、また法橋さんには講師としてご協力いただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

学生が書いた協同組合論講座のレポートを見てあらためて協同組合金融の役割を再認識しました。そもそも協同組合論の講師に法橋さんを推薦いただいたのは賀川記念館長の賀川督明さんでしたが、賀川さんご自身も協同組合金融の重要性を説いておられたと思います。「協同金融」の預金残高が民間金融機関全体の4分の1以上を占めており、そのなかでも信用金庫や農協の存在が大きいんでしょうが、そういう位置づけについては学生だけでなく多くの人たちが知らなかったと思います。2008年に「リーマンショック」が起こったとき、やはり協同組合金融がもっと影響力を持たなければならないと感じました。

ところで法橋さんが労金というステージに積極的に打って出られたきっかけはなんでしょうか？ またそれは法橋さんの生い立ちとどうかかわりがあったのでしょうか？

法橋 どう見てもベタな関西人なんですが、実は生まれは東京です。親はもともと神戸出身で、仕事の関係で東京に行っていた時に私が生まれました。そのあと小学校3年のころ神戸に戻ってきたんですが、当時、聴きなれない東京弁を私がしゃべるものですから神戸の下町の「悪ガキ」たちから寄ってたかって小突かれたりしました。しかし、もともと順応性で生きているので、一週間もすればすぐに関西弁しゃべってたように思います。私が住む下町は、戦争の傷跡、貧困、失業など、いろ



んな矛盾や課題を抱える街でもありました。

名和 私も大阪の大学に通っていたわけですが、そこでも在日や中国出身のみなさんが多く身近な存在であったと思います。そんななかで法橋さんの正義感がつくられていったわけでしょうか？

法橋 私が大学に入った頃は、少し前に燃え上がった学生運動の「残り火」の時代でした。私は、この「残り火」に少しだけヤケドしたりしながら、時代のうねり、社会の課題に出会ったと言えるかもしれません。

名和 法橋さんを見ていますと、いろいろなことをしてからようやく労金の道に進まれたような気がするんですが。

法橋 よく皆さんからそのように言われるんですが、最初から労金に就職し、そのまま勤めています。NPO、協同セクター連携や社会貢献などを進める業務を労金では共生事業と呼んでいます。10年ちょっと前に、この共生事業をスタートさせるときにNPO現場に出向していた時期があります。これ以外、ずっと労金職場ということになります。

名和 「銀行」と「労金」との違いなどについてどう思っておられましたか？

法橋 日々の業務自体は恐らく殆ど変わることはないはずですが、私の感覚では、その原理には基本的な違いがあると思っています。その昔は、労金の金融は「世直しの金融だ」とか、お預けいただく預金は、「助け合いの財源だ」というような言葉をよく聞きました。そもそもが、働く仲間を自分たちで支え合おうという労働者自主福祉運動のうねりの中から、労働組合が軸となって立ち上げてきた「共助の金融」ですから、当然、成り立ちや理念に大きな違いがあると思っています。

名和 かつてわたしは『まいど！南大阪信用金庫』（平井りゅうじ・北見けんいち）というコミックを通じて地域に貢献する協同組合金融の役割を知りました。ところで法橋さんにとって若い頃の忘れえぬ経験はおありでしょうか？

### 「きらりと光る」もの

法橋 労金の場合、多重債務などの相談を受けるポジションがあり、組合員の生活を守るという課題は丁寧にしたと思います。「反サラ金キャンペーン」のような展開もありました。仕事のことは、私は、組合員さんから負債整理の相談を受けることが多かったんですが、ご家族も含めたヘビーな相談に触れる中で、私の判断一つでこの方々の明日からの暮らしが大きく根こそぎ変わってしまう、そんな局面に幾度も会うわけです。自分が携わる「金融」の持つ凄惨な力、怖さも実感してきました。そもそも、労金は労働者の大切なお金をお預かりし、これを社会につないでいく金融仲介を担う訳ですが、私たち自身が社会をどう捉え、どんな政策で金融仲介するかによって暮らしや社会のデザインにも少なからず影響を与えることがあるわけで

す。私たちの理念が常に大きく問われているぞ、えらいこっちゃ、というのが、自らが関わる仕事への実感かもしれません。もちろん、労金といえども金融機関のひとつであり、業績をしっかりと積み上げていくこと自体がとても大事ですが、その中にあっても協同組合の金融機関らしい「きらりと光る」ものを大事にしながら仕事をしたいという気持ちは若い頃から持っていました。阪神の震災の頃までは営業店現場にもいましたが、労働組合の方から『障がい者が働ける共同作業所をつくったが、資金面で支援してほしい』という相談が入ることもありました。しかし当時は、それを融資でサポートする法的根拠がなく取り扱いができなかったわけです。今のようにNPOがまだ登場しておらず、この分野でも労働組合やその組合員が地域の担い手になることも多かったと思いますが、その中で、地域貢献型の社会的事業への事業融資が扱えないことを口惜しく思う場面がありました。相談のたびに『すんまへんなあ。まだ、できませんねん!』と言わざるを得なかったのです。

名和 先だっの協同組合論講座を受講した数名の学生が将来の就職先として労働金庫を希望していましたが、労金が組合員以外は利用できない、ということにショックを受けていたようです。わたしも中国の植林に関する「緑の地球ネットワーク」や中国での就学支援、教師の給与サポート、学校づくりなどを手がける「希望工程」などいくつものNPOに加入していると思うんですが、それらにも労働組合が関わっている例が多いです。

法橋



まさにそうですね。本来、労働組合はヒューマンな助け合いの仕組みとして、その積み上げた社会的力量はきわめて大きいものがあると思っています。協同組合もまたしかりです。しかしながら、どうしても「仲間の助け合い」がその組織原理となってしまうため、ともすれば、労働組合や協同組合など共益型の組織は内向きになりがちです。ここを乗り越え外に向かって開いてそのパワーを発揮できれば、ものすごい影響力を生み出すことができると思います。3年ほど前に、国連のILO（国際労働機関）から労金への国際調査がありました。そこでは、労働組合陣営が金融機関を創るという経営モデルが世界では殆ど成功していない、しかも日本の労金の規模で成功している事例は世界にはないはずだとおっしゃっていました。（2011年版。ILO雇用総局作成の国際レポート「エンプロイメント・ワーキング・ペーパー」）

名和 はたらくことの目的が高い給料をもらえるかどうか、というようなことになりがちですが、そうではなくはたらくことが人間を鍛えることであるという視点を若い方にもっと持ってもらうことが大切ですね。

## 「支えあう経済」をめざす

法橋 寄付講座のなかで学生にお伝えしたいのは、働くことと暮らし、社会のデザインは別問題ではなく、その働く現場の接点が良くなると社会は変わらないということです。今、「人を蹴落とす経済」＝グローバリズムが世界を席卷し飛び回っていますが、逆に「支え合う経済」もあり得るのだと思います。即ち、働くこと、仕事の現場でこそ社会を変えることができる、逆に言えば、「経済の現場から社会を変えようとする営み」がなければ変化はなかなか本物にはならないのだと思います。仕事の現場で社会の変革に関わることができる、という意味で協同組合セクターのフィールドはものすごい可能性を持っています。

「きつい社会」を創ってしまったのは大人たちだけけれど、なんとかその矛盾に<sup>あらが</sup>抗う人がNPOや協同組合に沢山いるということを知ってもらい、「仕事を通して、社会の矛盾とたたかう大人はかっこいいかも」と思ってもらえたらと思います。学生の皆さんには広くアンテナを社会に広げてほしいですし、NPOや協同組合だけではなく、社会の中で、さまざまな仕事を通して、世の中の矛盾と向き合おうという人々が実は沢山いるよ、捨てたもんじゃないよということをお伝えしたいなと思います。

名和 もともと「経済」という言葉は「経世済民」を訳したわけですから、本来は「民を助ける」という主旨であるはずがそうになってはいない。そういうなかで他所<sup>よそ</sup>に理想郷があるわけではなく自分たちの仕事の現場で問題を解決していくということですね。

法橋 金融は社会の屋台骨、社会に大きな影響力をもつポジションにいて、また、何にでも化けて社会ニーズのどこにでも出没できる存在です。一方カネは欲望の塊でもあり、暴走すれば社会を崩壊させる力を持っています。金融の現場は功罪取り混ぜて、実は結構ヒューマンで人々の気持ちによって動く面も多く、ある意味で怖い存在でもあります。ですので、最近では、社会貢献預金の取り組みの中で、社会により良い資金を循環させ社会を支えるために、「お金に意思を持たせよう」というキャッチ提案を会員労働組合の皆さんにも行なっています。

名和 労金の担当者はその重要な結節点におられるわけですね。ところで寄付講座でも多くの預金が集まればNPOへの融資を増やすことができるというお話をされましたが、学生レポートでもそのことに感銘しているものがありました。

法橋 かつて、長い間、今で言うNPOなどの団体に労金が融資することが法律上できなかった時代が続いていました。労金はオールジャパンの組織ですので、全国レベルで国に対してそういう非営利法人に融資できるよう要望してきました。そんな折、NPO法ができて労金としてようやく融資が可能になりました。これによって市民が担う事業に対して融資を通して支援する仕組みができる、いよいよ、労金の役割発揮がで

きると喜びました。

名和 それまでの労働組合との間で培ってこられた事業が実を結んでいくわけですね。

## 社会とのかかわりを

法橋 はい、労働組合との接点も大切でしたし、労金を地域や社会に活かす仕組みができることだと言えます。一方 1995 年に ICA（国際協同組合同盟）のアイデンティティ声明が出た時は本当に驚き、第 7 原則で謳われる「コミュニティへの関与」が協同組合の世界標準となったことに大きな共感を覚えました。市場競争などいろいろな要因はあるとはいえ、なかなか社会との接点を求めていけなかった日本の協同組合が、狭い「共益型」の殻から出ていく契機になるぞと思いました。当時、阪神淡路大震災もあり、NPO など多彩な市民活動も始まる中、労金や労働組合がこれら社会にアンテナを出していくよう役割発揮しようという議論が進みました。

名和 賀川記念館長の賀川督明さんがいつもそのことをおっしゃっていたように思います。 昨年の協同組合論の学生レポートを見てみると、最初は協同組合のことがよくわからなかったが、講義の終盤になって「コミュニティ」の問題は重要だ、というふうに理解を深めていったと思います。



法橋 学生はこれから出る社会の厳しさを実はよく知っていると思いますが、そのなかで協同組合のしくみを通して社会的な仕事があるという希望を感じてもらいたいと思います。世界の中で「弱肉強食のグローバリズム」が広がり、その牙が個人を直撃するような状況にあるなかで、逆に、世界に広がるグローバリズムに対抗するには、協同組合や労働組合、そして NPO などが「支え合いの経済」の担い手となって、その対抗軸になっていくことが必要ではないでしょうか？ われわれの協同組合ネットワークが世界にひろがっていくことを目指したいですね。

名和 もっとも評論家の内橋克人さんの、今の協同組合は現在の社会を支えているだけの存在ではないか、というような厳しい見方もあるようです。それは単なる協同組合批判でなく、もっと役割を發揮せよ、との意味合いを込めていると思いますが。

法橋 内橋さんがいうことはおっしゃるとおりです。今の協同組合は社会の現状を支えているだけで今後の展望をどう考えているのか、補完役に甘んじているだけで変革の主体にはなり得ないままでよいのかという問いかけだと受け止めています。金融分野でいうとマイクロファイナンスが注目されていますが、それだけでなく、例えば、ドイツでは環境保護のための銀行が設立され、そのための預金と呼ばれたら市民から大きな反応があり、ドンと預金が集まるということがあります。そのように社会を動かすお金の動きをつくるには、自分のお金を社会によく回したいという

市民の登場と、加えて、これらの仕組みづくりをする誰かプロモーターがいることが重要ですね。意思を持った社会的なお金が地産地消で回り、社会的なプレーヤーたちを支援することでコミュニティが元気になるということを見せることができれば、と思います。

名和 リーマンショックまでは「カネ」を扱う人たちのイメージについて正直良くはありませんでした。実態はそうではないと思いますが。

法橋 京都の労働組合の皆さん（京都労福協）の「自分たちのおカネで NPO を応援して社会に活かそう」という 2 千万円のお金を起点にして、これを労金が担保で押さえていただき、京都の NPO 専用で 1 億円の融資枠をつくりました。労働組合が自分たちのお金を通して、また、労金の金融機能を活用して社会に登場した好事例といえます。京都労福協さんでは、当初はこのお金を助成プログラムに使おうとの議論もあったようですが、一旦、助成で出せばそれで終わり。「金融は回してなんぼ。労金の仕組みを通して社会に循環させませんか」ということで、この仕組みが創設できました。

名和 まさに持続可能な社会をつくる、ということにつながりますね。ところで奈良教育大生協の専務さんから、奈良県南部、十津川地域の災害支援のとりくみ企画を紹介されたんですが、労金さんが関わっておられるんですね。

### 「自前主義」をこえて

法橋 労金には『地域貢献預金・すまいる』というお客さんの金利を少し低く設定した預金商品があります。低く抑えた金利の差額と、さらに、これに同額程度を加えた額を労金が寄付して、エコ、災害、国際、子ども、などで頑張る NPO を応援しようというのですが、その中の支援先の一つ「災害コース」として、今回、台風で傷んだ十津川地域の道普請みちぶしんのための現地行きバス代支援に充てようというものです。もともと、労金だけではできないものですから、「自前主義」はやめて現地を良く知る NPO の人たちと一緒にがんばろうと考えています。

名和 それこそ「内向き」ではない協同組合間協同であり、「社会への関与」の姿勢のあらわれですね。

法橋 もともと奈良 NPO センターさんとはよくご一緒していましたが、十津川支援に奈良教育大の学生さんが参加されるということだったのでジョイントしました。12 月にもバス 2 台が出る予定ですが、今度は奈良県生協連さんにも協力いただき、また、ならコープさんからは 10 名もの役職員の方が参加される予定で、大きく裾野が広がってきています。

名和 協同組合論講座をしていくなかで、今まで顔をあわせていなかった人同士のネットワークがどんどん広がっていく予感がありました。先ほどの災害支援のとりくみ

を通して協同組合間協同がすすみ、社会へのかかわりが進展していくことはすばらしいことですね。

法橋 社会的なプロモートをしていくのは協同組合の人間の本来の使命ではないかとも思っています。例年、取り組んでいる障がい者のアート展を今年は12月に京都市内各地で開催します。いくつかの大学生協さんにもご協力いただくことになっています。

名和 大学生協でもこれまで「命のメッセージ展」などに協力してきました。今回の絵画展についてコープイン京都や他の大学生協でも協力できればと思います。

法橋



今後、「非営利協同連携」で地域の融資制度などを生協・労働組合・労金と一緒に創っていくこともできるのではないかと思います。加えて、私たちは「コミュニティへの関与」をつくる側にいるわけですが、その場合には、協同組合間だけの協同ではなく、多少考え方に違いがあっても地域のNPOの皆さんなどとともに幅広い非営利・協同セクター、即ち、「サードセクター」を形成していければと思います。その際、お互いをつなぐ仲介役として金融が役割発揮できる機会があると思いますし、また、これらの地域の「基盤」「核」として、生協の皆さんの存在はとても重要であると思います。これまで金融機関は、「雨の日に傘を取り上げる」などといわれてきましたが、個別の融資判断は当然にあるとしても、周りの環境に左右されて<sup>てのひら</sup>掌を返すようなことのない、ミッションの高い融資を続けられればと思います。

### 人材をつなぐ核として

名和 法橋さんがいまお考えの、協同組合金融の今後の展開についてお聞かせください。

法橋 非営利・協同セクター連携でのファイナンスの可能性を考え続けたいと思っています。社会的連帯でつくる枠組みを、場合によってはオールジャパンでも考えられな  
いか。生協さんやNPOには、潜在的な事業ニーズがあると思いますが、それをどうとらえるかでしょうか。たとえば大規模災害が発生すれば、購買生協さんは逃げることなく、物資を地域に供給し続けるといった役割発揮をする必要が求められる訳ですが、その時には当座の資金的ニーズがあるのではないか。その場合、包括的な災害支援協定などの枠組みを創りつつ、協同組合の連帯でリスクをシェアしながら資金供給のためのいろんな仕組みができるのではないかと考えています。

名和 3.11大震災以降も多くのNPOがさまざまな優れた活動をしているのを見て感動を覚えたわけですが、大切な活動をしようとしても結局、全体の枠組みができなければ進みません。知恵と力を持った多くのひとが一堂に集まることのできる場をつ

くる、人と人をつなげる場が不可欠だと思います。

法橋 人材は沢山いて、いろいろなところで活躍されているわけですが、そうした人たちがどう繋がるかがカギだと思います。どこの組織でもそうだと思いますが、ふだん部内の人だけと話していると、どうしても内向きの議論になってしまいます。むしろ営利企業の企画マンや社会貢献担当の人たちのほうが、普段からアンテナを立てて『新たなマーケット開発について、あの NPO が水先案内人になるのではないか』といったことを柔軟に考えたりしています。

私たち協同セクターは、「縦割り」という従来から払拭されきれていない弱点をこえ、協同・連帯の力で新しい可能性に挑戦していくことが必要ですし、自分の組織だけではなく、広くアンテナを出して、非営利・協同の視点で社会を見渡せる人材の育成ができればと思います。それこそ協同セクターとして次代を担う人材育成ができればと、切に望みたいです。

名和 本日は協同金融の現在と未来についてさまざまな面から語っていただきありがとうございました。

(2013年9月12日 於・コープイン京都)